

内より湧く泉

外には雨がしょぼしょぼ降っています。火の気の少しもないこの部屋で暁鳥さんの「運命論者の群」を読み、宮崎さんの「聖貧への思慕」を一気に読んで、煮えたぎる私の胸を抱いてジツとして念しかしてしまいました。まだ原稿がちつとも書けていない。原稿締切りは過ぎた。

私はペンをとります。そうして書きたいこの心に私の体をまかせます。またしても念しかします。

南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 南無阿弥陀仏 ……………

湯から湯気が立つように、私の魂は知らず知らず念しかします。意味あつての念仏でもない。ありがたいからでもない。救ってもらいたいのもない。ただ自然に念しかします。そして思索にふけります。

「私は広島でございます」「私はくであります」「私は安芸郡であります」聞法求道の人たちが苦しい胸を抱いて訪ねてこられる。静かに夜がふけてゆくことがある。私はちつとも私が教えたり導いたり、私が善知識になつて解決を与えようとするような我慢な心はもたない。私は、参考までに私の話を聞いてもらう。と言つても苦しむ人を見ると無限に同情する。自覚も何もない人を見るとたまらなく気の毒な気もする。けれどもどうして私に教える力があるろう。私はただ湧いて出るままにお話をする。

私は支部のある地方や、なつかしい人たちの多い所に行つた時、二時三時と夜をふかしてもさらに去ろうともしない熱心な人たちのことをなつかしく思う。そうして久遠の迷いから目覚めて「お救い」を自覚して下さつた時、いつもみ仏のお慈悲の大きなことに感激する。

阿弥陀経には「一切世間のために、この難信の法を説く。これを甚難とす」とある。無量寿経巻下には「もし斯の経を聞きて信樂受持することは、難中の難にしてこの難に過ぎたるは無し」とある。聖人は正信偈に「弥陀の本願念仏は、邪見憍慢の悪衆生、信樂受持すること、はなはだもつてかたし、難中の難これにすぎたるは無し。」とお戒めになりました。

救われたという自覚に入ることとは、我慢我執の強い私たちにはまことに困難なことであります。だんだんと育てられて、少しずつ我執がとれてきますと、大きな力にはからわれていることが知られてきます。私は新しくほんとうに目覚めて下さる方に当面した時、思わず合掌し、涙さえ催すことがあります。

信心をいただこう、何かもつともraitたいと、誰でもあせつてこられます。けれども、もらう物もなければ受取るものもない。何ももらわなくてもよかつたとの大安心に至るにはなかなか骨が折れます。

「墮ちるのでございませう。水の中へでも水の中へでもどこへでも、一切の罪の報いを誰にも負つていただけでない以上、私が全部、素直にこの大責任を負つて地獄へでも、餓鬼道へでもおちてゆくのでございませう。」

魂の夜明けは近づく。久遠の本性がはつきりと照らし出されました。それはちょうど、黎明が近づいて、東天緑に晴れてシラジラと光は地上になげられて、朝霧の内に地上の万物が見えてきたように、光が魂の内に輝きそめた時、そこに、醜い久遠の自性は現われてきます。

「墮ちる！ だから救ってもらいたい。」

この自力のはからいに応じてくれるものは、ただ、人を迷わす邪神たちや、仏のすがたを表わした悪魔でありました。

「頼んで出て助ける神もなければ、仏もない！」
魂は行きづまりました。

「私は長い間寺参りをして、涙を流して喜んだこともありましたが、でもそれはじょうずな芝居を見た時のように、哀れな話を聞いた後のように、間もない内に消えてしまいました。」

悪い心のおこった時、それがお慈悲のお目あてだと、われとわが機をおさえて見ました。けれどもそれも私の自力でした。

聞いてもだめ、知ったもだめ、ありがたいのはなおさらだめ、何もかもだめとわかつては私はいつたかどうかなるか。」
行きづまった魂はなお続けます。

「かかるやつめをこのままだと思つても、自力ときかされては、しよせん私を助ける仏もなくりました。無理を考えていました。鉄なら必ず沈むのです。水なら必ず流れるのです。」

罪の大荷物を負う者がいない、全部私が今日まで負うて来たのだ、今からも誰も負うてくれない。皆自身が負いきるのだと聞かされてはまことにまことにそうでした。私は謹んで火でも水でも刃でもその報いを受けます。謹んで受けます。」

2

光に照らされる自性

救いにすがろうとした魂は、哀れな祈祷の称名を称えていました。

彼の魂はそれをやめました。そうして今、彼は彼の罪を負うて永劫の火におちて行くこうと観念の眼をとじました。彼の眼には涙がにじんでいます。お寺への攻撃ではないが、説教師たちは、長い間、哀れな聞法者の群を感傷的に酔わしてきました。そうして感情一点張りで法蔵菩薩の御苦勞に泣かせて来ました。信徒たちの知慧の芽はのびる邪魔をされて、ただありがた屋の亡者になってきました。死に近よる老人たちの気慰めであり、人生を逃避する弱者のあきらめの道具のようになってきました。

多年寺院で聞法した人がたずねて来て申されます。「聞いている間は有難いと思いましたが。涙さえ流れます。けれどもその有難さが消えた時には、その底から言うに言われぬ力がむくむくと頭をあげてきます。これではたまらぬとまた聞きに参ります。そして幾度も幾度も同じことをくりかえしてきました。もうとても私には信仰は得られないのでしょうか。思えば憶えばやつかいなものを多年もらったものであります。」と申し合わせたように言われます。

聞法者の誰も気付かないことではありますが、誰でも初めは何かほしいとかかります。何かないと気がすまぬのです。それで信心を得ようとして求めにかかります。けれども信心というようないつこう得られないで、まず見えてくるものは、得たいものの反対ばかりであります。

わかろうとかかれば、わからん。

安心しようとかかれば、安心がならん。

ありがたいの続けようとかかれば、いつこうありがたいとない。

ありがたいの続けようとかかれば、続かない。

おちつこうとすれば、おちつけない。

いつも反対ばかり見えてきます。一口に言えば疑いと言いましようか、暗と言いましようか、そうした苦しさが聞けば聞くだけはつきりと出てきます。誰もこれに囚われます。

けれども説教を聞きに参れば、この心の奥の塊が静まって美しいありがたい虹のよな袋に入れられてしまいます。でもそれは、信仰でも金剛の一心でもなくて、ただ一時的の感激であります。お気の毒な御苦労な方になると、この揮発性のよろこびが消えかけた時には何だかさびしいので説教を聞きに参ります。そうして一時的な気安めとは知らずに、またこのありがたいあるものを入れてもらいにいきます。自性は胸の底におしこめられています。こうしたことを一生くり返して信心者になった気持ちの方があります。これでは救われたのでも何でもありません。そんな方に限って自分の信仰をこわされまいとあせつたり、他人が何とか言おうとむきになって自分にとてこもって議論します。

ありがたいのは信仰に伴うもので、言わば粕であります。ありがたいだけをもつて信仰の証拠にしたり、ありがたい心が続けようとするがごときは、心の内の空虚であることを物語っているのです。話が横道にそれましたが、誰でも自分の自性を知らぬほどつまらぬことはありませぬ。鉄が自分で金だと思つていたり、色の黒い醜婦が美人だと思つていたり、弱者が弱者だと知らなかつたりするほどばからしいつまらぬことはありません。自分の自性を知るといふことは、これほど賢いことではない。だからギリシャの金言には「汝自身を知れ」とあつたそうです。自分の自性が何であるかを知るとは急務の中の急務であります。

自分自身の何ものであるかも知らずに騒いだところで、それは何にもなりません。一文なしの私どもが、十萬円の家を建てたいとあせつたところが、それは一個の空想であります。小学校にろくに行かなかつた四十男が大臣になると力んでも、それは誇大妄想狂だと世間の物笑いの種になります。病人は病人と知り、ばかはばかと知れたら、たいしたまちがいはおこりません。自分を知るといふことほど大切なことはありません。

世間普通の人たちは、自分という者を徹底的に一度御存知になつたことにはないで、自分をたなにあげておいて他人のことばかり気にしています。自分の顔に墨のついていることには気がつかないで、人の顔の墨にのみ気がつきます。

ありがたい心でも始終続くものではないのです。人間の感情は一時に激してきても、時がたてば静まつてきます。親の臨終に流した涙でも十日も二十日も続くものではない。芝居を見て同情して泣いても家に帰ったら消えています。何でも感情は長続きするものではないのです。それなのに、聞法の時の感激を永続させたいなどと考えることは徒勞であります。

一時的の感激でなくて、腹の底から湧き出でる円融自在なよろこびと、生きぬいて行く力を与えられることが信仰であります。

何かを得ようとして得られずに、見たくない、知りたくない自性が見えてくることに誰でも当惑するのでありますが、ここが宗教とか信仰とかのありがたいところであります。

我であつてしかも我ならざる光が心の内に輝いて来ますと、私どもは自性を見せつけられます。それが私どもの全財産であります。わかろうとしてわからんとか、安心しようとして安心ができぬとか、法悦を続けようとして続かないとか、それが自性で、ほんとの自分が知れてきたのです。瞋恚の心や、欲心や愚痴を言うことは、人から習つてこなくても、もらつてこなくても、自分に持ちあわせがあつて無尽蔵に出できます。これらが私の財産の全部であります。

それらの全部がはつきりと知れてきたことは、魂の黎明が近づいたことであります。私の経験によると、得ようとして得られず、知ろうとして知られず、全くだめな自分が見えてくる、全否定に立つことがないと、信の芽は開いてきませぬ。自覚と言4
います、自覚の第一歩は、自分にほんとに徹することであります。部分的に、親に対して不孝者と徹底するとか、夫に対して真実でなかつたと徹底するとか、学生として自覚するとか、女子として目覚めるとか、そんな自覚でなくて、われをあげて全人格的に目覚めることであります。

それが信念の生まれる根本であり、浄土の開けてくる第一歩であります。

救う者

平素不正直ばかり言う商人が、神棚の前で柏手を打つて、金儲けを神様にねがふ心持ちは、不正直から来る罪の全責任を神様に負わす考えなのであります。お稲荷さんとか、お大師さんとか、種々なものをつぎこんで、拜んでいる人たちは、自分の責任を人になすりつけようとするずるい人たちであります。

けれども難行雑修をゆるさぬ真宗にさえ、罪を全部仏様が負うて下さるようになっている人が大方全部であります。とんだ考え違いで、それでは横着者が勝つことになりません。

罪の重荷は物的な物でない以上、私からはなすことは出来ません。随つて誰も負うてくれる者はない。では一体救われるとはどう救われるのだという大疑問がおきて来ます。

宗教とか信仰とかいうものが全く救われることである以上、(1)救うべき者と、(2)救われるべきもの、とがなくてはならぬ。(3)救われるとはどうなることか。この三個の問題が当然おこつて来ます。

(1)救うべき者、救うとは誰が何を救うのか。

「親鸞におきてはただ念しかして弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをこうぶりて信ずる。外に別に子細なきなり。」

弥陀に助けられる。親鸞聖人は、はつきりと「弥陀に助けられる」と言いきつていられます。

それでは弥陀とは一体何か、何処にいられるか。仏教全体、殊に大乘仏教では「衆生悉く仏性あり」申します。十方衆生という以上、白色人種だろうが、アメリカの黒人であろうが、悉く仏性があるわけであります。仏性とは仏たる性質であります。仏の本性であります。真如の妙理であります。普通真宗では、全く我をはなれた仏をときます。けれどもこれは全く知ることの出来ぬ、純粹主觀の仏なるが故に、又全く純粹客觀の仏とるのであります。けれども通仏教上、大切で、ことに聖人があれほど重要視して教行信証の内におひきになつた涅槃經を読む者が「一切衆生悉有仏性常住無有變易」(涅槃經二十七)を認めないわけにはゆきませぬ。

すると貪瞋煩惱に狂わされてある罪惡甚重の凡夫の魂の根底にも、この仏教はその妙理を發揮しているのであります。

性とは「不改の義なり」とあります。因果に通じて自体の改まらざるを性というのであります。如何なる力を加えても、どんな因縁に出あつても、決して改まらないのが性であります。如何に罪惡に汚れても、煩惱に狂わされても、永久に変わらないのが仏性であります。

私が十方衆生の一人である以上、微かながらもこの仏性を本具していることは間違いないのであります。華嚴の説によると、三仏性ということを申します。

一、自性住仏性

二、引出仏性

三、至徳果仏性

自性住仏性とは、真理の妙理が自性常住であつて、如何なる時にも変改のないことでもあります。如何なる迷い深い私どもの魂の奥底にも、耿々たる常住の燈はかかげられてあることであります。

引出仏性とは、本具の仏性が智慧禪定などによつて、その面目を發揮して来ることであつて、真宗で言うならば、念仏三昧の風光になることだと思ひます。仏性が煩惱の全面に輝き渡り、仏性の本来の活躍を表しはじめることであります。

至徳果仏性とは、引発される仏性が、本具の風光を遺憾なく了々顕現して、修因満足して、仏果に至ることでもあります。即ち成仏と見ていいでしょう。この仏性と弥陀とはどんな関係があるのでしょうか。

私どもが、如何に内省しても、如何に努力しても、この内なる仏性を認めることも握ることも出来ないであります。そこに照し出される者は、ただ久遠の自性であり

ます。貪瞋煩惱のあさましい姿であります。仏性は、この内省の上に立つて見出される自分の内に全く我ならざる我となつて融合されてあります。

親鸞様が「弥陀にたすけられる」と言われた弥陀とは何か、それは大無量寿経に説かれてある法蔵菩薩の願行円満成就せる弥陀如来であります。上巻には救済の本尊たる仏の、仏となられた原因と結果とが説いてあり、下巻には救済の原因と結果が説かれてあります。

通俗的な従来の説教では、我を全くはなれて実在する十万億土西方の弥陀如来に救つてもらふように説きました。けれども十万億土と限定された極楽であるならば、絶対無限の仏ではない。極楽ではない。いつたい仏とは全く魂の世界であります。物を以つて作られたものは滅びる時があり、限度があります。

祖聖は、真仏土巻に、「謹んで真仏土を按ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。」と言つていられます。絶対の光であります。四十八願に酬報して成就されたる南無阿弥陀仏は、全く尽十方無碍光如来であります。際限なき光であります。そしてその光は、一時的のものでなくて、永劫に流れて消えぬ常住無量寿の光であります。即ち仏は時間と空間にわたつて無限絶対者であります。今や法蔵菩薩は、この無限絶対、無量寿の光となつて、煩惱衆生界に肉迫し來つて、全く我ならざる我となつて我を生かしておるのであります。

『安心決定妙』には

「念仏三昧というは、『報仏弥陀の大悲の願行は、もとよりまよひの衆生の心想のうちにいりたまへり。しらずして仏体より機法一体の南無阿弥陀仏の正覚に成じた6もうことなり。』と信知するなり。願行はみな仏体より成ずることなるがゆえに、おがむ手、となふる口、信ずるところ、みな他力なりというなり。かるが故に機法一体の念仏三昧をあらはして、第八の觀には、『諸仏如来、是法界身、入一切衆生心想中。』ととく。これを釈するに『法界というは、所化の境(たすけらるべきものという意)すなわち衆生なり。』といへり。定善の衆生ともいはず、道心の衆生ともとらず、法界の衆生を所化とす。『法界というは所化の境・衆生界なり。』と釈する是れなり。まさしくは『こころいたるがゆえに身もいたる。』といへり。弥陀の身心の功德、法界衆生の身のうち、こころのそこに入りみつゆえに、『入一切衆生心想中』と説くなり。ここを信ずるを念仏衆生というなり。」

衆生の魂の奥深く、そこに如来の大願成就を知るのであります。弥陀の身心の功德は、法界衆生の身のうち、心のうちにいりみちて、絶対のはからいを続けているのであります。それを「一切衆生の心想中に入る。」と言うのであります。これによって、私は私の如来を信知します。「衆生悉く仏性あり。」ここに私の仏性を見出しますのであります。

その五劫永劫の修行は、私の胸の内に刻々作り出す大焦熱地獄の火中に立つての行であつたと知れて來ます。全くの他力であります。そうして、この如来は十方法界に充ち充ちたまえる尽十方無碍光如来であります。全く他力の中の他力のはからいによつて、生かされ育てられて來たのであります。救うべき者、それはかくの如く、私の内にあつて我と知らざる我となつて、我をつき動かし、我を働かし、我を導

き、我を仏まで向上させようとした私の根本実在、我になくてならぬものを与え、我を育て、我を天と地との間に生かす宇宙の根本実在、それが私を救う仏であったのであります。自然法爾と申します。この自然の妙用が私の内に極楽世界を開いてくれる力でありました。

救わるべき者

普通私どもが我と言っているものは、内省すればするほど罪に汚れている我であります。日々の生活にやつれて、物質と名利と愛欲に乱れている私であります。すなわち凡夫であります。

悪人と申しても、道徳的善悪や、法律上の悪人というような、対他的のものではなくて、全く自分の内に見出されるつきつめた自分であります。

道徳的には少しの善事もあるでしょう。法律の網にはかからなかつたか知れませんが、けれどももつともりとつきつめて、自分の全体を見つめた時、如來の手もとに出して恥かしくないほどの善は一つもありません。全く、曾無一善(曾て一善無し)、唯知作悪(唯悪を作るを知る)の自分が見えてきます。罪という罪、悪という悪、それを念々に作り出して、やむことのない自分を見ます。これこそすなわち、無限の欲を迫うて満足しようとする自分で、苦をのがれようとして苦にせめられ、無明の惑をもつて悪業をつくり、悪業によつてさらに一層の苦を生んで、底のない苦惱に沈みはてようとする、根本を惑に根ざした、業の繫縛から出ることのできない自分であります。すでにわが内にこれを見る。ここにどうしても救われねばならぬ私が現存します。いったい私どもは自分が悪いとはどうしても思われず、社会が悪い、国家の政治が悪い、家内が悪い、友が悪い、近所が悪い、と平気で申しますが、一度ほんとうが知れたものは、自分以外に悪人を認めません。

清沢先生は、真の朋友について書かれた中に、こんなことを言っています。

「真の朋友は、互いに相求むる必要がない。ただ自ら真の朋友たる資格を持てばよい。」

私たちは自分に真の朋友たる資格のないことは言わず、真の妻たる、夫たる、親たる、子たる資格のないことは言わずに、すぐ朋友をせめ、妻を裁き、夫に求め、子を孝行一点張りでおしつけようとします。

「全体、求むるといふことは、自分において不十分なところがあるから、その欠陥を補うがために、求むるといふことが必要であるのである。」

自分の全部をつくして不完全がないなら、他に求める必要はないのです。親の不完全を子供に求めようとしたら、夫の夫たる資格のないことには気づかずに、妻に求めたりするのは、自分を知らない愚の極みであります。

「朋友の資格を求むるのは、自己について求むるのである。自己の精神において真の朋友たる資格を獲得することに努むるのである。」

自己の内に求めるかわりに、おしなべて外にばかり求める者への大痛棒であります。先生はさらに、

「世間には朋友を選んで交われと言うようなことがあるが、真の朋友は互いに相選ぶ必要はない。また自分が真の朋友の資格さえあれば、いかなる人と交際してもさしつかえない。畢竟・朋友を選ぶという根拠は、朋友というものに善友と悪友との区別を立てて、善友には交際してよいが悪友には交際してはならぬと言うのであつて、つまり自分に対する利害を主としていつたものである。」

世間普通、いつさい万事が皆そうである。妻は悪いが自分はよい。子供は不孝するが自分はこれだけの親切で育てた。自家はよいが隣が悪い。労働者は資本家が悪い。資本家は労働者が悪い。誰もかれも、悪い悪いを相手につけて、一度も自分には気がつかない。この我をうちくだいて行かない以上、自分の一真実すなわち救われるべき機の実が見えない。この反省の上に立つて、「自分総ぐるみにだめだ！」といきづまらない以上、とこしえに永遠への大道は開かない。

私は「私の打砕かれた者」を初めに書きました。一時の感激の上に、虹のように現われていた仏もあやしくなり、ありがたいと思つた心にも見切りをつけ、落ちまいとも、地にも、存在するものはこの罪と悩みをかかえて死に行く自分のみである。親鸞様の「いずれの行もおよびがたき身なればとても地獄は一定すみかぞかし。」との悲痛な告白は、救いを予想してのそれでもない。隙や暇のある言葉でもない。

絶体絶命、久遠の迷える魂が無始の過去から今日までの内、たつた一度ふき出した、ほとぼしり出た、ほんとの魂の未曾有の声である。

このいきづまりにおいて我は根本から砕かれる。我が砕かれた刹那、この貪瞋煩惱の内よりふき出す力がある。

落ちる者は落ちるがいい。

罪の報いを受ける者は受けるがよい。

疑いのある者は疑いぬくがよい。

誰に責任をなすりつけてもならぬ。

全責任を自分で負うのだ。十字架だ。

苦からのがれて行こう、責任から遠ざかつて行こうとすればするほど、苦は後より重い荷物となつてついて来る。無形の荷物はおかしいものだ。負うまいとする者は重く、負うて立つ者には何でもない。全く重みがない。

地獄は苦よりののがれて楽を追おうとするもがきから生まれる。

「俺が」「俺が」と我の世界に迷いが生まれる。

みんな人は自分のすべてに対する罪を全部荷のうて立つがいい。

そこにきつと、ある偉大なる力を感じるのであろう。

救われた自分を見出すであろう。

念仏は腹の底よりほとぼしり出る。

救われる話を聞いていて、ただ口先や、頭の中で「私は地獄行き、それがそのまま如来様の御慈悲で救われるそうだ」と知つていて、救われると思つていても、それは虫のいい話だ。

ほんとうの名体不二の自然の念仏が生まれてこない以上、久遠の本性をありがたい袋に入れていても、それでは救われたのではない。救いに賛成したのだ。救われるとは信の世界が私の内に生まれて来ることだ。念仏の腹ができることだ。仏性が円融自在な働きを煩惱中にはじめることだ。

宇宙に遍満したもうみ仏は、み仏独り立ちにて生きたもう。み仏はまことに絶対の独立者にてまします。そうしてみ仏は慈悲と智慧とによって、独り立ちのできる独立者を作りたもう。

瓜の種を一粒地にまけば、彼は全く自分の力で芽をきって、葉を出して蔓をのびして生きて行く。

彼の内にはのびる、生きる、青々と茂る力がある。

彼は全くの独立者である。力をもっている。つきのびる力によって彼はのびて行く。

力はただ一つである。そこに二つの力はない。ただのびてゆく力は一つである。

重ねて言う、二つの力が働いてはいない。

この例話について深い省察がしてほしい。かの瓜が、自力で生きて行かれるその力はどうして得たか。かりに瓜のたねを畳の上において見る。千年たても芽はきらない。地にまかれた時、彼は天と地との恵みを一身に受けた。その天地に満ちる恩恵が彼を育てているのではないか。太陽を天よりのけよ。大地から土の香を去れ。水を去れ。空気を取り去れ。そうしてもまだ彼の瓜は独立着たる力の所有者であろうか。

かの瓜の中に、天地に満ちる力と、彼が太る力と、二つの力を見ることはできない。そこにはただ太る一つの力しか見いだされない。たった一つの、のびる力は、全く彼の自力である。厳然として天地間にあるものは、太りつつある瓜、それだけである。けれどもその一つの力の中に絶対自力はそのままに、絶対他力を見るのではないか。

私は念しかしています。救われています。そうして生きています。永劫の彼方に生きてゆきます。この天地間たった一人を生きて行く私は、全くの自力で、独立者で、火の中へも苦悩の中へも立ちきる力を生活している。けれども、そこにまたたった一人のみ仏が生ききっています。たった一人のみ仏が生ききっていることがそのまま、私がつた一人生きています。

力は一つであります。力一つが現われるためには、そこに太る機と、太らす法とがあります。力のあらわれは一つであります。

この極致にふれた者は、信の世界に誕生したのであります。往生したのであります。不退の菩薩になつたのです。何の願いもない念仏が生まれてきます。

浄土他力門では長い間、仏と凡夫と二つに対立した、死んでから往生する、あぶないきわどい臨終正念の信仰をつづけてきました。あてにならぬ、未来で救われる信仰にとどまっていました。それを親鸞様が七高僧の信仰を通して、死んでのち救われる

ような、変なあてにならぬことになしに、信じた時に救われる、即得往生の信仰に生きられました。

自力で念仏する。そしてその功德で往生するというような、自力半分他力半分の信仰もありました。否、今の時代でもそんな臭味のある信仰がたくさんあります。お救いということ、地獄行きを捕えて無理やりに極楽につれて行って下さるという風に思っている人がほとんど皆であります。もつとも、四十八願の中、第二十願では不果遂者の願がとかれてありますから、方便としては自力の者も如来の大威力で先天的に我慢のとれない者でも助けると言ってはありますが、それは化身土の往生であります。お救いは、ほんとお救いは、そんなものではないのです。竹に木をつぐということがありますが、迷いのままが、このままで救われるのだと育っていたところが、味もすっぱもありません。ありがたがつておれば一時の気安めになります、生きた力とはなりません。

富士山の中程の石が、愚痴を言っていました。「わしが」「俺が」と我ばかり言つて外の石を見て喧嘩しています。彼は、そんな石が集まつて富士山ができていることを知らなんだのです。汽車に乗つて通る人から見れば、そこには富士山一つが美しく雲にそびえているだけであります。

富士山は別に石をみとめません。ただ富士山自身であるばかりです。石が不平を言つたり、愚痴をこぼしたり「わしが」を繰返すのは、富士山とは自分の体つづきであることを知らないからです。けれどもいつか、富士山は石が迷っているのを見て、知らせました。石はハツと知つた時には、その石がいかに粗末であろうが、形がよからうが、そのまま富士山を莊嚴しているのことに目覚めました。そして彼には迷いがなくなりました。しかし外形はどこまでも前通りの石でありました。石を一つ一つ取りのけたら富士山はなかつたのであります。「わしが」「わしが」と我がとれないから、そこに迷いがあるのであります。我がとれて見れば「そのまま」で、極楽世界を莊嚴している不退の菩薩であることに感激するのであります。

そうして何もいらぬ、このままでよかつたと、得ないままに大安心になれます。内からは泉のように言い知れぬよろこび、力がふき出ます。